

大腸がん検診のおすすめ

●大腸がんはがんによる死亡原因の上位です。

大腸がんによる死亡者数は 1990 年代から急激に増え続け、2003 年からは**日本女性の死亡原因 1 位** となっています。2021 年には、全国で男女合わせて 52,418 人が大腸がんにより命を落としています。

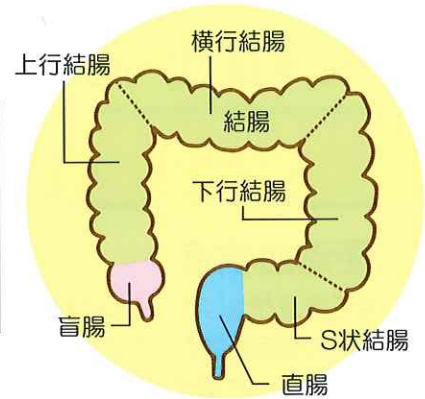
2021年部位別がん死亡者数

【全国】

全体	部位	人数
1位	肺	76,212
2位	大腸	52,418
3位	胃	41,624
4位	膵臓	38,579
5位	肝臓	24,102

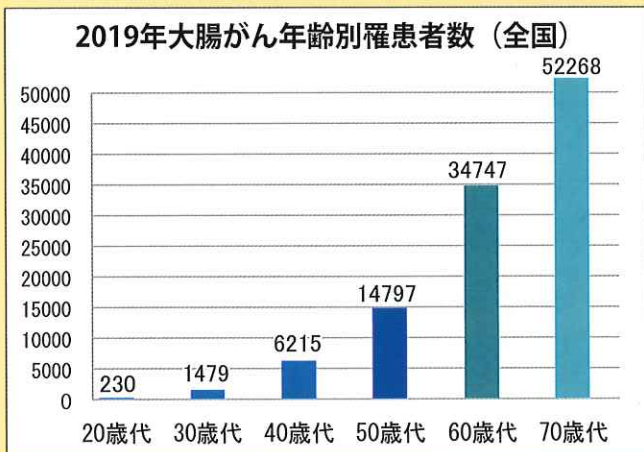
【秋田県】

全体	部位	人数
1位	肺	759
2位	大腸	627
3位	胃	538
4位	膵臓	384
5位	胆のう	278



国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」・R4 がん対策施策報告書 より

●大腸がんは高齢になるほど発生リスクが高くなり、40歳代から罹患率が上昇します。



国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」

●毎年検診を受けましょう。

大腸がんは、早期に発見すれば高い確率で完全に治すこと（治癒）ができます。しかしながら、早期のうちには自覚症状がないことが多く、自覚症状が現れた時には既に進行している可能性があります。

だからこそ、**40歳以上の方は必ず毎年検診を受けて、早い段階で大腸がんを発見し、適切な治療を受けることが大切です。**

【大腸がんのステージ】

5年生存率

95.1%

88.5%

76.6%

18.5%

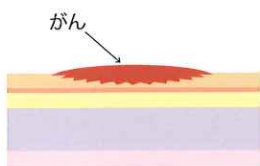
低

がんの進行度

高

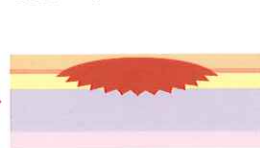
【ステージ0】

粘膜の中にとどまっている



【ステージⅠ】

固有筋層（筋肉の層）までにとどまっている



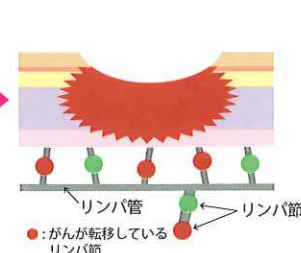
【ステージⅡ】

固有筋層を越えて周囲に広がっている



【ステージⅢa】

3個以下のリンパ節に転移している

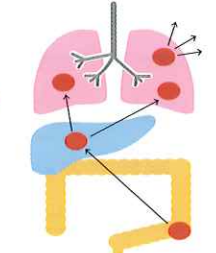


【ステージⅢb】

4個以上のリンパ節に転移している

【ステージⅣ】

肝臓や肺、腹膜など離れた臓器に転移している



※大腸がんの診断を受け治療を継続している方は、検診の対象外となります。

※生理中は便潜血検査を行うことができません。痔の症状がある方は治療しましょう。

国立がん研究センター 2010-2011年 5年生存率 より



公益財団法人 秋田県総合保健事業団

県北健診センター TEL 0186(63)1837

中央健診センター TEL 018(823)1520

県南健診センター TEL 0187(73)6200

大腸がん検診はこうして行います

検診申込

検体提出・問診・便潜血検査

便潜血検査

便に血液が混じっていないか調べます。がんやポリープなどの大腸疾患があると、便が腸内を移動するときに組織と擦れて血が付着することがあります。便潜血検査では目に見えないごくわずかな血液も検出することが可能です。

※便潜血検査で要精密検査となった場合、便潜血検査の再検は不適切です。必ず精密検査を受けてください。

便潜血陰性
精密検査不要

便潜血陽性
要精密検査

必ず受診してください。

精密検査

異常なし

良性疾患

がん

次回の検診

主治医の指示に従ってください

治療

問診では、痔の症状について、自覚症状の有無、家族歴、過去の検診の受診状況などをお聞きします。

「要精密検査」の結果が届いたら……

精検依頼書と健康保険証をもって必ず専門医療機関を受診してください。精密検査では、全大腸内視鏡検査や注腸X線検査を行います。

全大腸内視鏡検査

下剤で大腸を空にした後に、肛門から内視鏡を挿入して大腸内を観察します。ポリープやがんなどの疑わしいところがあれば、その場で組織の一部を採取(生検)したり、直接ポリープを切除(ポリペクトミー)して細胞レベルで調べる病理検査をします。

S状結腸内視鏡検査

S状結腸内視鏡検査は、日本人で最も大腸がんの発生率の高いS状結腸を内視鏡で観察する検査です。肛門から50～60cmの範囲まで観察します。

注腸X線検査

注腸X線検査は、肛門からバリウムを注入し、大腸全体の状態やがんの位置・大きさを確かめます。

精密検査の結果は自治体と関係医療機関で共有し、検診の精度向上に努めています。

検診ですべてのがんが見つかるわけではありません。また、がんでなくても検診の結果が「陽性（要精密検査）」となる場合もあります。しかし、便潜血検査による大腸がん検診は大腸がんの死亡率・罹患率を減少させる有効性が認められています。

早期発見のために、40歳以上の方は必ず1年に1度、検診を受診してください。

なお、気になる症状がある場合は次の検診を待たず、すぐに専門医を受診しましょう。